ごあいさつ

本調査は､2006 年度文部科学省先導的大学改革推進経費による委託研究として一橋大学が受託し実施したものである。このたび、文部科学省から許可をいただき、一橋大学留学生センターから報告書として刊行することになった。

本調査は悉皆調査として全四年制大学を対象に実施したが、実に 94.4%の大学からご回答をいただいた。ご多忙の折にご回答くださった皆様にこの場をかりて心よりお礼申し上げたい。本報告書によって、その労に少しでも報いることができるならば幸いである。また、委託元である文部科学省ならびに独立行政法人日本学生支援機構には、多方面にわたりご協力いただいた。あらためて感謝申し上げたい。

調査は、2007 年 1 月から 3 月までという短い期間に実施されたもので、不十分なところも多々あるが、研究者一同、今後の政策の基礎データとして生かされるものと期待している。

調査メンバーは、以下の通りである。受託校である一橋大学の留学生課に事務拠点を置き、研究メンバーは一橋大学に限らず、広くこの分野の第一線の研究者ならびに統計学の専門家にご参加いただいた。アンケート調査の印刷・発送・回収・基本統計の算出は留学生調査に実績のある財団法人アジア学生文化協会に再委託したが、常に連携をとりながら実施した。

調査メンバー ：

研究グループ代表者	横田　雅弘（一橋大学留学生センター教授）
研究メンバー	服部　　誠（一橋大学国際戦略本部統括ディレクター）
	太田　　浩（一橋大学国際戦略本部准教授）
	新田　　功（明治大学政治経済学部教授）
	白石　勝己（アジア学生文化協会理事）
	坪井　　健（駒澤大学文学部教授）
	工藤　和宏（獨協大学外国語学部専任講師）
研究協力者	白土　　悟（九州大学留学生センター准教授）

質問紙の作成については、横田・太田・白石・坪井・工藤・服部が中心となってたたき台の作成を行い、その他のメンバーからもコメントをいただいて完成させた。報告書の作成については、基本的にすべての章について全員が議論に加わり、コメントしたが、中心となった執筆陣は以下の通りである。

第 1 章　「分析の枠組み」は、メンバー全員で議論して作成した。

第 2 章　第 1 節「過去の留学生数の変遷に基づいた趨勢線による補外予測」は、 白石論文をベースに新田と白石が執筆した。第 2 節「留学・就学資格の入国者数推移と地域別特性」は白石が中心となって執筆した。

第3章　第1節「アンケート調査の概要」は、坪井が執筆した。第2節「単純集計の結果とコメント」は、横田が執筆した。第3節「在学生数と留学生受入れ数による大学のカテゴリー設定(予備的分析)」は、新田が執筆した。第4節「大学規模と留学生数および留学生率との関係」ならびに第5節「5年後と10年後の留学生数についての回答の分析」は、新田が統計的に分析して執筆した。第6節「クロス集計の結果と分析」は、坪井が執筆した。第7節「将来の留学生受入予定数と留学生の受入方法、学内の受入れ条件、社会的政策的要因との関係の分析」は新田が統計的に分析して執筆した。

第4章　「まとめと提言」は、研究協力者の白土も含めてメンバー全員で議論したものを横田がまとめた。

巻末には、本調査票だけでなく、今後の日本の留学生政策の策定に資すると思われるテーマで3本の特別寄稿論文(新田功「オーストラリアのIDPによる留学生数の将来予測」、太田浩「米国における外国成績・資格評価(Foreign/International Credential Evaluation)システムと日本への示唆」、白土悟「中国の留学交流の将来動向に関する考察」)を掲載した。今後の大学の留学生政策・戦略を策定していく上で極めて有意義な論考であり、こちらも合わせてご参照願いたい。

2007年9月24日

研究代表者　横田 雅弘（一橋大学留学生センター）